

戦前・戦中のIBMをめぐる日米インテリジェンス攻防戦

第22回諜報研究会 2018年5月26日

山本武利（NPO法人インテリジェ

ンス研究所）

2001年以降のIT業界の急展開

IBMのハードディスク売却

日立へのIBMハードディスク売却

2002年

中国IT企業の台頭

レノボによるIBMパソコンの23億ドルでの買収

2014年

中国のIT一国民統制、世界覇権への野心のツール

サイバーテロと東北アジアの危機

2000年のCIAの資料公開

IBM 機械設備の日本での使用状況レポート

—IBM 日本代表取締役の情報提供とコメント

Report on Records in Japan on which I.B.M. Mechanical Equipment is used—

The Location and Nature of such Records—with Comments by I.B.M. Representative on Key Records in Japan, Record Group 226 Entry211B Box20

資料翻訳 『Intelligence』3号 2003年

資料の概要

1944年9月11日付けのニューヨークの Foreign Economic Administration(外国経済管理局)の Confidential 扱いの資料。

1937—1940年に IBM の極東ならびに日本支社の代表者で、1944年当時ニューヨーク駐在のベルギー領事だった G.D.Chevalerie(シュバリエ) (写真1) への同局のインタビュー記録。

戦時下の企業インテリジェンスを受け持った外国経済管理局が日本での IBM (当時の名称日本ワットソン) の活動から、日本での政府、軍、企業の重要資料、情報の管理システム

や生産管理を把握しようとして、彼に接触した記録である。



G.D.シュバリエを囲んで(昭和13年10月、山下町のオフィスで)

写真1



創立当時の社屋(横浜・山下町)

写真2

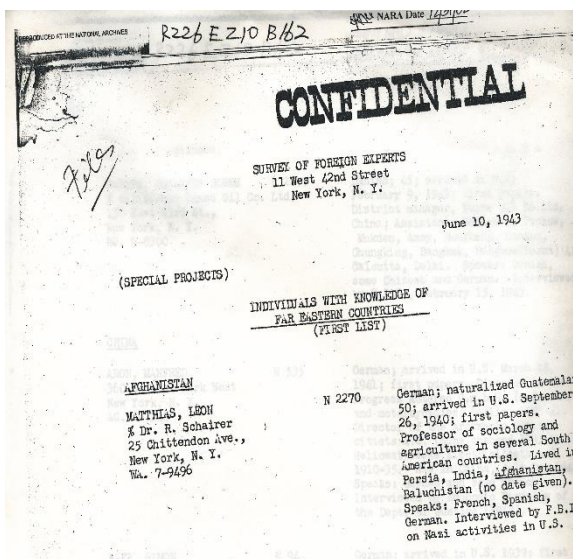
日本進出初期のIBM

創業時 1937年(昭和12) 会社名 日本ワットソン統計会社
本社横浜市山下町(写真2) IBMの全額出資、代表取締役シュバリエ(社史年表20頁)

日本のカスタマー(『日本アイ・ビー・エム50年史』76頁)
第一生命、日本生命、安田生命、明治生命、住友生命、
立川飛行機、中島飛行機、大同製鋼、日本陶器、東京芝浦電気
三菱重工業、武田薬品工業、塩野義製薬、住友金属、
貯金保険局、日本銀行、軍需省、農林省、神戸商業大学

1940年時点での日本進出米企業49社の1つ

日本ワットソン統計会社の名を記したSSU資料 (写真3)



CHEVALERIE, GUY de la
% Belgium Consul
New York, N. Y.

BM 10/5/42 Managing Belgian director of
International Business Machines in
China and Japan (Yokohama), 1936-40.
Secretary to Belgium Ambassador in
Tokio and visited Manchuria and
Mongolia, 1931-35. Speaks: French,
English, Japanese.

写真3

シュバリエの素性の出たOSS資料 (写真4)

OSS (戦略諜報局) が外国経済情報局からこの資料を入手したのは、元来、幅広いインテリジェンス活動をしていたからであろう。OSS作成の1943年6月10日付け「極東諸国の知識を持つ個人」の資料には、彼は日本の専門家として記載されている。そこには彼が1936年から1940年、IBMの代表者であったが、その前の4年間は東京駐在のベルギー大使の秘書で、満州、蒙古に訪問した経験があり、フランス語、英語、日本語をしゃべるとある。なお『日本アイ・ビー・エム50年史』には、彼はヨーロッパIBM支社から派遣されて初めて来日したとあり、また日本語が不自由だったとある(47ページ)。

彼は1941年にベルギーに帰ったとある(69ページ)が、その月日は不明。開戦直前であろう。またニューヨーク領事となった時期もわからない。領事になってから、ベルギーの同盟国のアメリカのインテリジェンス機関との接触がうまれたのであろう。

シュバリエは日本滞在時にアメリカ情報当局との接触があったかどうかはわからない。彼はスパイではなかったろう。が、日本支社にヨーロッパ本部から派遣される時、彼はアメリカのインテリジェンス機関の意向が働いていたと思われる。少なくとも彼はニューヨーク滞在時に各機関からの要請に積極的に対応したことはたしかである。IBMのカスタマー

情報をアメリカ当局に正確に伝えるばかりでなく、日本企業とくに飛行機メーカーのシステムや軍の狙いを的確に捉えている。彼は開戦後ある時期からアメリカ当局への情報提供者 (informant) であったことがわかる。そして彼の情報はそれぞれの機関で活用されたことであろう。

IBM が主力カスタマーの生命保険会社以外にカスタマーを開拓すべく、開戦の 2,3 念前から飛行機メーカーに精密部品管理と組み立て工程の能率化に役立つとして、同社機械の売り込みを図ったことは、日米の緊張関係が強くなかったからであろう。したがってインテリジェンス的意図は露骨ではなかったろう。当時アメリカ当局も IBM やロッキード社の動きが利敵行為になるとの考えがなかったと思われる。

1939 年、ロッキード社が立川飛行機に技術者を送ったことが、IBM と立川の契機となったが、それはまた日本陸海軍幹部が IBM へ注目する契機ともなった。精度の高い規格品の大量生産や暗号の解読という機能を IBM 製品に日本軍は期待するようになった (社史 71-72 頁参照)。

日本陶器へのレンタル 1 号機が工場火災で焼失したと同社から IBM に報告されていたが、シュバリェはそのシステムの 1 部が呉海軍工廠で使用されていることを発見したという供述は、早くから日本側が IBM の軍事的価値を認識していた証左ともいえよう。

立川、中島飛行機の相互技術交流、共通部品化にみられるように、飛行機製作が産軍一体でなされていたこと、また各地に分散して生産した部品を両者が IBM 機器で組み立てるシステムであった。立川飛行機の資料は戦災で焼失したが、中島飛行機の後身の富士重工業の社史は分散生産の模様をかなり記述している。

彼は開戦時 IBM にストックされていた機器があり、日本支社の 2 人の技術者がそれを動かす能力をもっていることに触れつつ、軍事転用されていることを示唆している。

アジアの日本軍占領地に IBM がかなりカスタマーをもっていることも供述している (社史によると、フィリッピンやサイパンの米軍使用 IBM を日本は鹵獲し、本土の神戸製鋼所に搬入していた (社史 76 頁)。なお同社は 1937 年に金銭登録機の開発に成功していた (社史年表)。

日本では IBM よりもレミントン・ランド社 (三井物産扱い) の機器の方が市場を握っていたが、軍は IBM の方の性能を高く評価していたようだ。

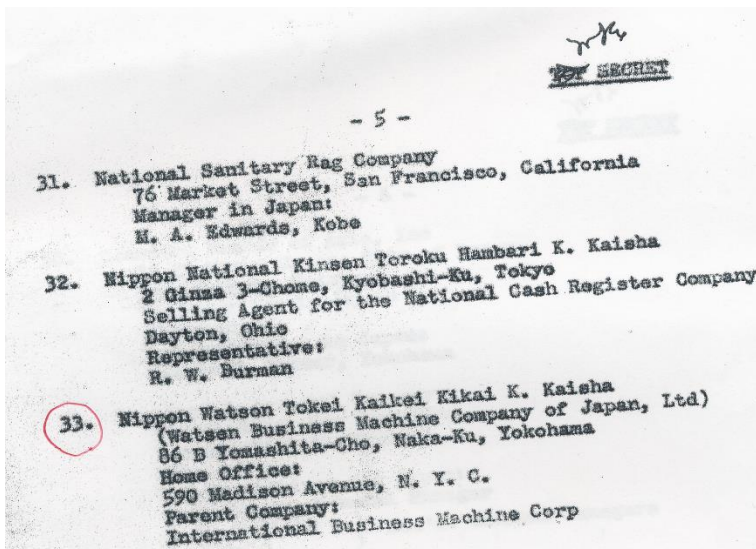
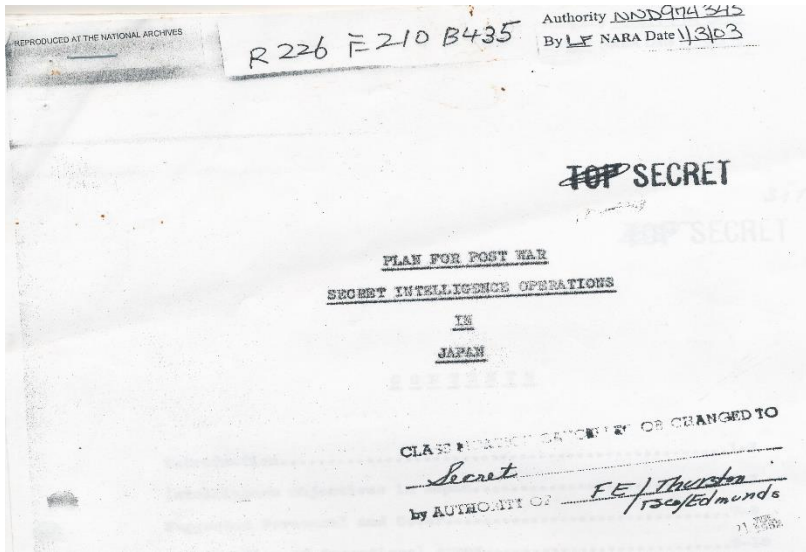


写真 4

シュバリエのアメリカへの最も重要な漏洩情報—周到な開戦以前からインテリジェンス機関の戦略

MIS (陸軍諜報部) からの尋問をこれ以前に受けていたことは、この文書に出ている。MIS は飛行機工場爆撃その他の戦術、戦略的情報を得るために、彼に接触したのであろう。

I BM機器の日本戦闘機工場での使用状況 (3号翻訳の1部分)

立川のプラントはほとんど組み立てであった。ある組み立て部品はこのプラントでも作られていた。シュバリエが最初に立川に IBM 設備の使用を勧誘し始めたとき (1937年)、1機ずつ飛行機を製造する工程をまだ行っていた。この会社は陸軍と提携していた。

重要なのは、立川と中島飛行機が互いに他社のモデルを広範囲に製造していたことで

ある。たとえば中島がある新モデルを陸軍用に完成し、それから陸軍がそのモデルにある改良品を取り入れたいと決め、中島がたまたまそのとき海軍の仕事で忙しいならば、陸軍は立川に中島モデルを渡して、その製作に当たさせた。

1939年、ロッキードがゴードット（彼も陸軍諜報部の広範囲の聴取を受けた）というプランニング技術者を立川に派遣し、組み立てラインでの飛行機製造加速法をレクチャーさせた。ゴードット自身は生産管理レコードのメカニクに関する専門的質問に答えられなかった（ロッキードはIBM機器を使用していた）ので、東京のIBM事務所に相談してきた。ゴードットのレクチャーを受けて、立川はIBM使用に関心を持ち出した。

シュバリエによれば、その直後からIBM事務所に日本陸軍の将校がたくさん来て、IBM管理システムの立ち上げのために立川で日本側が行っていることをシュバリエ側がどの程度知っておく必要があるかを疑わしげに突き止めようとした。（当初日本側はロッキード設備にかんする完全な情報をIBMが教えてくれないかと求めてきたが、IBMがその設備は秘密で、日本側にその1部たりとも教えられないという、彼らはひどく落胆した）。『Intelligence』3号）

日本の防諜の甘さ

開戦直後、シュバリエの後任となった水品浩は3ヶ月間スパイ容疑で拘束された。その期間は英米系企業責任者としても、異常な長さであったという（70ページ）。したがって離日時でのシュバリエへの日本官憲による身辺調査は嚴重だったとおもわれる。彼は書類を持ち出せなかったと思われる。

この資料にあるように、彼は日本支社からアメリカ本社へ送付された記録に依拠しつつ、日本時代の記憶を付加して当局に情報提供した。IBMが社として、米当局にカスタマー情報の記録を提供したことはこの資料が証明しているところである。暗号解読などで軍に活用された機器メーカーとして、またアメリカ資本の企業として、アメリカ政府、軍への忠誠心が強く、敵国のカスタマーへの配慮はなかったと見てよからう。

シュバリエは個々の企業の収益よりも国益で動いている産軍一体の日本株式会社の本質を鋭く把握している。

彼の供述は米軍の工場爆撃などの戦術に役立ったと思われる。立川飛行機は徹底的な空爆を受け、多数の死傷者を出した（『立川空襲の記録』参照）。立川飛行機、呉海軍工廠などの防諜意識の低さ、さらには日本軍の防諜工作の弱さがシュバリエの証言価値を高めたことは否めない

彼はゾルゲのようなスパイではなかったが、日本のハイテクの配置や弱点を周到に把握した偵察者（オブザーバー）ないし情報提供者（インフォーマント）であった。

国家安全保障にかかわる行為が今後IBMによって繰り返されることになれば、グローバルな情報・ソフト企業のガバナンスと世界各国の安保にかかわる大きな問題に発展することを示唆している。